

近現代における自己存在に関する一考察

—バックパッカー・外こもりの自分探しの超克にみる“関係的自己”という地平—

A Study on Self Identity Existence in Contemporary Society:
Transcending Self-Searching of “Backpackers” and “Sotokomori”
to Realizing the “Relational Self”

井口 康弘
IGUCHI Yasuhiro

1. はじめに

人はいつも＜私＞にこだわる。「無私」とか「無我」という言葉があるが、実際にこれを実現するのは至難なことである。＜私＞へのこだわりから自由になれないのは、人間存在にとって一つの宿命あるいは業と言うべきであろうか。(梶田、2008：5)

私は常に私を意識する。このこと自体が人間の虚しさを物語っているが、現代人においてさらなる悲劇は、私によって私の存在を自己諒解せざるを得なくなったことである。つまり、自分探しをせざるを得なくなったということである。これが現代的不幸である。

「問わなければいけないのは、存在はどこにあるのかであり、その存在こそが人間の本質だということである」(2013a：172)と内山が問題提起するように、現代社会において、私たちは自分の存在について、根本的に問い直す必要があるのかもしれない。なぜならば、近代哲学にもとづくような、個人を主体とした人間の有り様が目に付くからである。このことは当然、筆者も例外ではない。そのような近代個人主義を生み出した西洋からも個人主義への不信感が述べられている。

懸念の第一の源泉は個人主義 (individualism) にあります。もちろん個人主義といえは、多くのひとびとが近代文明のもっとも輝かしい達成とみなすものを指しています。わたしたちが生きている世界では、ひとびとは自分で自分の生活パターンを選択する権利、どのような信念をもつべきかを良心にしたがって決める権利、近代以前のひとびとには手に負えそうもないほどいろいろなやり方で自分の生活形態を決める権利をもっています。(中略) 近代的な自由は、それ以前の道徳の地平から抜け出ることによって獲得されてきました。かつてひとびとは、自分たちをもっと大きな秩序の部分だとみなしていました。その秩序とは宇宙の秩序であったり、「存在の大きい連鎖」であったりしたわけです。(中略) 個人は [自分] より大きな社会、大き

な宇宙という行為の地平を失った。そしてそれとともに、何か大事なものを失った（中略）個人主義には何ごとも自己を中心にするという暗黒面があって、それがわたしたちの生を平板で偏狭にし、意味の乏しいものにし、他者や社会に対する関心を低くさせているというわけです。（テイラー、2004：3-5）

これは、他者を顧みない利己的な振る舞いがあるといった単純な問題ではない。個人の中に存在の主体を確立しようとすることによって、自己存在の喪失感に苛まされることが問題なのである。矛盾して聞こえるが、個人が確固とした自己の形成を求めてきたがゆえに、その各個人がアイデンティティクライシスとも呼べる状態に陥っているのである。近代以降、自己の確立の手段は様々なものがあつたが、それらに共通するのは、個人の中に押し込められた自己存在の追求であつた。その追求の限界として、アイデンティティにまつわる問題が多く見られるのである。

本論文は、筆者の修士論文をもとに一部抜粋し加筆したものである。修士論文では、自己に自覚的であることを求められる不幸を提示し、その中で自分探しをする実存的現代人の姿を自己疎外に陥つたものとして論じた。その実存的現代人の一例として、バックパッカーという対象を用いた。

2. 自分探しとその帰結

「自分とは何者であるか」という問いに駆られ、自分探しの旅に出る若者は少ない。自分探しとは、内在する確固たる自己の発見を目的とする行為である。自分と向き合う中で見えてくる核心となる自分を発見し、自分語りの材料にするものである。もしかしたら、その自分語りをする瞬間こそ、自分探しそのものだと言えるのかもしれない。自分で自分を確認しているという意味においてである。そう駆り立てるのは、自己を確立しなければならないという強迫観念であるだろう。ここには、個人の中に自己があるという前提があり、自分に自覚的であることを強要する社会がある。

(1) “主体性”に求める自己

“自分探し”以前には、“主体性”というものが流行っていたようである。これは当時流行っていた実存主義の影響があるのかもしれない。小林敏明は「1960年代にはこの「主体性」という言葉がまるで氾濫するかのよう飛び交った時代である」（2012：634）とした上で、その後の、70年代へという流れの中での変化を次のように述べる。

吉本隆明の「自立の思想」などがもてはやされたのもこの時代である。学生どうしの討論、あるいは若い芸術家たちの言説のなかで「君に主体性は…」とか「主体的に考えろ」といった言い回しがさかんにつかわれるようになった時代である。（中略）この氾濫気味の「主体性」も学生運動の終焉にともなって70年頃を境に消えていく。（中略）代わって出てきたのが「アイデンティティ」とか「私探し」というような言葉だが、もはやそこにはかつてのような政治的ニュアンスは込められていない。むしろきわめて個人的な「心理」の問題として先鋭化していったように思われ

る。(2012 : 643-644)

このように、かつての学生運動も自分探しの一手段であったのである。小熊英二は、「全共闘運動は、高度成長にたいする集団摩擦現象でもあったが、日本史上初めて「現代的不幸」に集団的に直面した世代がくりひろげた大規模なく自分探し運動であった」(2009 : 794) と述べている。

“主体性”にしても“アイデンティティ”にしても“私探し”にしても、なぜ、確固たる自己を追求するようになったのか。ここには、「存在から実存へ」とした実存主義の影響があるだろう。「実存は本質に先行する」としたときの実存とは個としての存在であった。つまり、「私ありき」で物事を考えるわけである。しかしながら、大前提としている個としての「私」を定義付けるものがない。「私探し」を始めたのは、実存主義の当然の結果だといえる。

(2) バックパッカーについて

① メディアにみるバックパッカー

日本においてバックパッキングという旅の一形態が広まったのは、書籍による影響が大きかったと思われる。小田実の『何でも見てやろう』(講談社 1974)、五木寛之の『青年は荒野をめざす』(文藝春秋 1974)などを代表とする、多くの体験をし、知見を広げることを目的とするような海外旅行記が発表されはじめる。

「70年代から80年代にかけて、沢木耕太郎や藤原新也などの作家たちが自ら海外での1人旅を著し、それに魅せられた多くの若者たちがバックパッカーとして海外を旅するようになった(2006)」と有本尚央が述べるように、旅行作家による刺激的な体験記は、その当時の閉塞感が漂っていた社会を生きる若者たちを海外へと向かわせた。

また、『『地球の歩き方』に代表されるようなガイドブックが1980年頃から次々と出版された』(有本、2006 : 117) ことも、バックパッカーが一般化したことに影響を与えた。さらには、「80年前後、現在では格安航空券の大手となったエイチ・アイ・エス(当時、秀インターナショナル)、MAP = アクロス・トラベル・ビューロー」(新井、2001 : 115) などによって格安航空券が登場したこと、86年のプラザ合意による円高が大きな影響を与えた。

「90年代には、お笑い芸人・猿岩石のヒッチハイクによるユーラシア大陸横断というテレビ番組企画」により『『バブル期』ともいえるバックパッカーの爆発的隆盛』があった(有本、2006 : 117)。「バブル」という言葉を使っていることから、90年代の日本においてバブル経済が崩壊したことによる就職難や虚無感が影響して、旅につながったとも考えられる。「自分探し」という言葉が流行り出したのもこの頃だったように思われる。

こうして容易になった異国への冒険は、若者たちにとって、海外に行けば可能性が広がる、新たな自分が発見できるという夢の肥大化へとつながったのである。「自分らしさ」への渴望の中、若者はバックパッカーとして世界を放浪することに自己のアイデンティティの拠り所を求めるようになった。(2011 : 62)

大野が述べるように、海外でバックパッカーの旅というのがひとつの、自分の価値を高めてくれる手段であり、自己を確認する手段でもあった。

② 近現代におけるバックパッカー

宿代を十円でも二十円でも切り詰め、移動は現地の人々の乗るバスや列車の三等席……という旅である。一日の出費を五百円などと決めながら、物価の安い国を半年、一年と歩いていく旅のスタイルである。(2007:7)

下川裕治はバックパッカーの特徴をこのように表現している。確かにこのような旅、もしくはこのような旅をしている人物像が一般的なバックパッカーのイメージとよく結びつく。しかしながら、このような下川のいう修行僧のような旅のスタイルは、現代においてもはバックパッカーの中ではマイノリティであるかもしれない。そのことに関しては、第4章で言及することとする。

現在語られるバックパッカーの直接の起源となると、「泥沼化していったベトナム戦争だといわれる。アメリカでの反戦運動にかかわっていった若者が、その運動で味わった無力感のなかでザックを背負い、ヨーロッパに向かったのだ」(下川、2007:9) というように、1950年代アメリカにおいて発生したものだと考えられる。

その背景には近代から現代への移り変わりがあった。見田はこの時代のアメリカをこのように捉える。

「現代社会」の特質として多くの人によって語られてきた、「豊かな」社会、消費社会、管理化社会、脱産業化社会、情報化社会、等々という徴標の群れが、人間の歴史の中で、初めて全社会的な規模と深度とをもって実現されたようにみえたのは、1950年代のアメリカである。(2004:2)

ときは少し下り、ヨーロッパ各国、日本と学生運動が展開されていく。1968年のパリのカルチュラタン占拠に端を発する五月革命が起こる。その同じ年、日本でも東大紛争が起こり、神田カルチュラタン闘争へと発展していく。この時系列をみても「それから20年くらいの間に、『スイス、西ドイツ、スカンジナビア諸国』だけでなく、西ヨーロッパと日本を含むいくつかの社会が、基本的に同様の局面に入」(2004:2) ったと見田が述べるように、近代から現代への移行を特徴付ける時代と、反戦運動や学生運動が発展する時代が一致することは注目すべき点である。

さらにはそれらの時代、つまり、「都市化や産業化や合理化や資本主義化」(見田、2004:i) などの特徴とする近代社会から、それらとは区別されるような「『ゆたかな』社会、消費社会、管理社会、脱産業化社会、情報化社会」(見田、2004:2) などが特質としてあげられるような現代社会への移り変わりがあった時代、そのような近代から現代へという移り変わりの中でバックパッカーが発生していること、そこにひとつの必然性があったことにも言及の必要がある。それは「60年代欧米におけるシステム化

された社会に対する疎外感から実践されたものであり、それに代わる生き方を求める運動の一つだった」(須藤、2008:48) というように、近代における人間を疎外させる様々なシステムから自由になるための実存的な行為でもあった。

③ バックパッカーの自己疎外

運動にしても旅にしても、埋没し見えなくなった自己を再発見するための一手段であった。レールから外れることによって、本当の自分を掴み直そうとしたのだった。

しかしながら、この時代のバックパッカーの旅も、実は当時の若者文化論に基づくマーケティングにより、特に80年代からのバックパッカーは商品としてのレールの上の旅路を歩かされていた一面がある。もともとは、順応主義的社会によって疎外された自己から抜け出し、自由になることを目的とする旅であったのが、そのような自分らしさを意識する現代人に対して格好のマーケティングされた商品となり、その作られた自分らしさのなかを歩かされ、結果、自己疎外に陥るといふ皮肉なものになった。

須藤廣は、ツーリズムとしてのバックパッキングという視点から、その「自律的な旅」は「産業化された過剰なサービス消費から抜け出す」ためのひとつの手段であったとし、その後のバックパッカーの変質についても述べる。それは「1960年代にカウンターカルチャーの一つから生まれたもの」だったが、その自律的で脱消費的な旅は70年代から変化をみせたという(2008:47)。

「航空機運賃の低価格化と、ガイドブック、テレビ、インターネット等、旅行メディアの発達によって、……消費の対象へと組み込まれて行った」。そこに「バックパッカー・ツーリズムの『真正さ』探しは、消費システムのループから脱しようという志向を持つ一方、その脱消費志向そのものが、消費のループのなかに組み込まれる傾向にある」バックパッカーの「パラドキシカルな」姿を須藤は見ている(2008:47)。

④ バックパッカーの差異性

「80年代の若者は豊かな社会に生まれ、育った。すなわち彼らは消費生活に欠乏感を感じることはない本格的な第一世代と目された」(新井、2001:117) というように、本格的に近代的不幸を克服した世代の消費行動は以下のように他者との差異化を求めた。

「他人と同じ」「人並み」であるよりも「他人と違うこと」、つまり自らの「個性」「感性」をしめすことであった。(中略) それゆえマーケティングの分野ではこういった記号的価値を全面に押し出した商品展開が図られることになる。中でもバックパッキングはそういった差異化消費の手段としては格好の選択肢のひとつだった。誰もが気軽に行くことができ、情報も豊富に流通する欧米ではなく、旅行にある程度の困難と危険をとまなうアジアなどの「エキゾチック」な地域へ、そしてスタイルは独自性を強調するバックパッキング(新井、2001:117)

つまりはマーケティングされた旅路を、自由な旅、通過儀礼、自分探しとして歩まされていたバックパッカーたちがいた。

そのような、他者との差異性に自己の発見をすることをやりがいとしていたバックパッカーであるが、「90年代に入り情報化・消費社会化はさらなる進展をとげ……他者との差異化そのものが無意味化してしま」ったという。そして「他者との差異化に意味を見いだせなく」なった若者の「差異化対象はこれまでの自己に向けられる」ようになる。「個性化・差異化の重要性を説く若者はあいかかわらず多いが、他者に対する視線の欠落傾向がある、つまり他者に対する関心度は低い。」(新井、2001:117) というように、差異化する対象が自己に向けられ、常にアップデート、バージョンアップしていく存在としての自己となった。

このように、見つめる対象がさらに内へと向かい、その自分探しは行き場を失っていくことになる。

⑤ 沈没するバックパッカー

蔵前仁一が『旅ときどき沈没』(本の雑誌社1994)を出版したことから、沈没という言葉が広がり始めたのかもしれない。筆者がバックパッカーをしていた2003年には、日常的に飛び交う単語であった。「沈没2週間くらいになるかなあ」とか、「おれたち沈没組だから」など、会話のなかで聞くことがあった。「沈没の意味するところは、旅の途中で、気に入った街に一ヶ月、二ヶ月と滞在してしまうこと……まさにその街に沈没してしまう感覚。なにもせず、ただぶらぶらとすごすことを沈没と呼んだ」(下川、2007:15)というが、それはまだ旅の一過程にあった。一般的に沈没という言葉はネガティブな響きを伴っているが、筆者は必ずしもそうとは思わない。

確かに、この沈没している期間というのは、それまでの旅に対するモチベーションが極めて低くなっている状態である。ただ、寝起きし、飯を食い、語らい、耳と目を澄ます。能動的な旅を一時止め、他者との関係性に自己を埋没させる。そこでひとつ見えてくるものがあると考えるのである。

それは、「〈あらゆる効用と有効性の彼方にある自由の領域〉であり、他の何ものの手段でもなく、それ自体として直接に充溢であり歓びであるような領域である。」(見田、2004:167)とバタイユを引用して述べているような至高の生である。それまでの自力に頼った自分探しの旅に行き詰まったタイミングで、この「ただ生きている」快感を味わうのである。

⑥ 外こもりという帰結

海外で引きこもり生活をする。アルバイトなど日本で短期間集中的に稼いだお金を持って物価の安い国に行き、そこで長期滞在して生活することをいう。また、そういった人を外こもり族という。(中略) 滞在先で外出することは少なく、中には一日中宿にこもっている者もあるという。(日本俗語辞典2008)

2000年代に入ると、バックパッカーを描く書籍や体験記というものの雰囲気に変化が見られてくる。それまで、自己の変容を目指していたバックパッカーたちは、どちらかという、自分の落ち着ける場を探すようになる。『旅ときどき沈没』や『外こも

りのスズメ』などにそのような傾向が見られる。

すると、それまで海外経験を積み内的生産物を得て、日本社会へ再編入することが自分の付加価値になると考えられていたのが一転、現代社会に疲れた人びとの逃避先のように考えられるようになった。そのような傾向を社会問題として捉え、『日本を降りる若者たち』(下川裕治 2007) や『希望難民ご一行様』(古市憲寿 2010) などが著されることになる。

「なにもせず、どこへも行かない旅行者たち……。それはバックパッカーの系譜から見ても、新しいグループの出現だった。その端緒が沈没だったのだろうか、そこに内包されていた旅の部分すら抜け落ちてしまった若者 (2007: 17)」と下川裕治が述べるように、外こもりは、バックパッカーから派生したというのが一般的な認識である。

また、「ワーキング・ホリデーや語学留学によって『自分探し』を継続する」行動の裏には、夢や自己実現という言葉におかされている現代的不幸が見え隠れする。「彼ら『希望難民』から見えてくるのは、ニートやひきこもりとは対極にある社会の本流から外れた若者たちの外向きの逃避行動である」という見方もある(石原、2011)。2008年の段階で「日本人の外こもりはタイだけで6千~7千人おり、アジア全域だと1万人を超えると推測」されるという(朝日新聞、2008)。

ここまで、バックパッカーの自分探しは、その求めている真正さとは裏腹な消費や差異化といったものに飲み込まれている実体があることを確認した。そして、その自分探しは、夢や自己実現を内包していることも確認した。次に、そのような自分を求めさせる近現代という時代について確認したい。

3. 近代について

自由に選択する自律的な主体としての個人の集合により成る社会が、近代社会である。(大澤真幸、2012: 297)

このような社会、またはそれを構成する“個人”の発見と獲得は、人類の進歩によって勝ち得てきた叡智であるといった主張がいまだ主流にあるように思われる。

住吉雅美は「理性的自律の観念の起源をふりかえると、個人が自然視していた伝統的支配から自立し、自己の判断で自由な活動をなすという近代の幕開けをもたらした歴史的な意義をもつことは確かである」(1997: 1、強調は引用者による) というように、理性的自律思想の意義を肯定的に捉える。しかしながら、不思議に思うことがある。自立した個人として存在し、個人の自由を獲得したにも関わらず、なぜ近代人は自分探しに邁進することになったかということである。この矛盾した行動をどのように考えればよいのだろうか。

(1) 近代的自由について

自由主義に限界があるとすれば、「人間は自由である」という前提が証明できないこ

とだろう。「自由」は西洋に固有の概念で、やまとことばにはこれに対応する言葉もない。最近の脳科学の実験が示すように、自由意志というのは「自由に行動している」と感じる錯覚であり、実際の行動のほとんどは無意識に行なわれている。人間は自由ではないが、そう感じることは必要である。そうでなければ、ヘーゲルのように国家と市民社会の境界線が引けないからだ。「自己責任」も「財産権」も幻想だが、近代国家を成り立たせる上で必要な幻想なのである。(池田、2013、「池田信夫 blog」)

新自由主義者として知られる池田信夫でさえ、自由についてこのように述べる。このような錯覚とまで言われる“自由”というものが、自分探しをするバックパッカーを考察する中でひとつのキーワードとなる。なぜならば、自由を求めて旅をし、その中で本当の自分を発見するといった意識が多くのバックパッカーの中に見て取れるからである。

上で見てきたように、“近代”を定義付ける「自由に選択する自律的な主体としての個人……」の中にも“自由”が用いられている。このように日常的に使用される“自由”という言葉であるが、内山節は、「戦後の自由」という言葉を用いながら、その近代的な自由を「何者にも束縛されない個人の自由」であり、「何者にも干渉されないことを理想とした都市型の自由」と表現している(2015: 88-89)。

このような、個人の自由は、戦後の経済発展の中で、神話ともいえる共同幻想を形成していった。その代表的なものが、「都市は自由な街であり、田舎はさまざまなしがらみに縛られた地域」(2015: 87) というものである。

しかしながら実際の姿は、人間を孤独にするような、何者からも解き放たれた自由が都市にあり、関係が個人にもたらす自在な自由が地域共同体にはあったのではないか。

共同体の時代には、共同体に属していたことによって、自分の歩むべき道が誰にでも自然にわかっていた。だから人々は確固とした精神をもって、人間とは何かを語る事ができた(中略)ところが個人の時代になると、人々はすべてのことを自分の責任で判断しなければならなくなった。そのとき人々は、より自由な精神を発揮しはじめただろうか。それとも、自分が何をすべきなのかに迷い、うろたえ、社会の動きに従うだけの弱い人間になりながら、自分自身を喪失するようになったのだろうか。近代社会の形成のなかで人々の目に映っていたのは、人間に自由を与えたはずの個人の解放が、むしろ、ひ弱で自由の行使にさえ畏縮してしまう人々、を生まだしていく様子であった(内山、2014a: 30-31)

バックパッカーをはじめとする現代人もまた、このような突き放された自由の中でその道しるべを見失い、孤独と向き合うようになったのではないだろうか。

(2) 近代的自己について

近代的な個人の自由は、むしろ押し付けられたものであると捉えた方がいい。そう

やって裸になった個人は、進歩や立身出世といった身にまとうものを探し求めなくてはならなくなった。それらによって、自己を顕示するためである。

一般民衆に競争や立身出世が浸透しだしたのは、近代に入ってからである。稲垣恭子はこのように述べる。

「立身」や「出世」という言葉自体は江戸時代にもあったが、社会的上昇移動への欲望の喚起という意味合いをもつようになるのは明治以降である。(中略) 志を立てて学問に励むことによって社会的な成功をおさめることができるという「立身出世」願望の解放は、近代化の内側から駆動する原動力となった。(2012 : 318)

また、自己実現に関しても確認しておく必要があるだろう。もともと心理学用語だった「自己実現」という言葉は、マズローの『『欲求段階説』において、自己に固有の生き方や自分の能力や可能性を最大限に生かしたいという欲求として」最上位に置かれた。現代においては、「自己実現という言葉は、教育や経営の分野で広く用いられるようになり、「とくに、教育の分野では個性尊重の教育として呼応して、誰もが自己実現を目指すことが望ましいという言説が流布していき、進路指導や自己啓発の領域で広まった」というが、このような自己実現への「欲求とその実現手段との齟齬がかえって若者たちの生きにくさの一因にもなっている」という(刈谷剛彦、2012 : 519)。次では、そのような齟齬を生み出してきた近代的自己存在とは相対する関係的自己存在をみってみる。

4. 関係的自己について

(1) 関係的存在について

人間の本質は関係のなかにある (内山、2013a : 171)

20 世紀の哲学が問うてきたことのひとつは、人間の本質が個性にあるのか、それとも関係性、結び合いのなかに成立しているのかということであった。人は誰でも自分は自分であるという独立性をもっていると感じる。だがそれは精神現象としてそう感じているだけであって、実体は自分という個性のなかにはない。すなわち実体は関係性のなかにある。(内山、2013b : 17)

これまで見てきたように近代以降、西洋的な個人を基調にすべてのことが考えられるようになった。「人間の本質を個人という個性性におくのが、ヨーロッパの伝統思想であり、「まず個人があり、個人が他者と関係を結ぶ」と考えられるようになり、「デカルトはその個体の奥にある理性に人間の本質を求めている」(内山、2013b : 17) という。

私たちは自分自身に関する「物語」(自己物語) を絶えず編み直すことを求められている。私たちは自己の「アイデンティティ」を絶えず問い直される時代を生きてい

る』にもかかわらず、『本当に私』を内へ内へとばかり求めると必ず行き詰まる。むしろ現代の〈わたし〉探しは、日々の他者とのコミュニケーションにおける相互の承認のプロセスのなかで、自分の〈いま・ここ〉の役割の意味を、批判的観点も込めながら深く理解することによって可能となる。(2012：1368-1369)

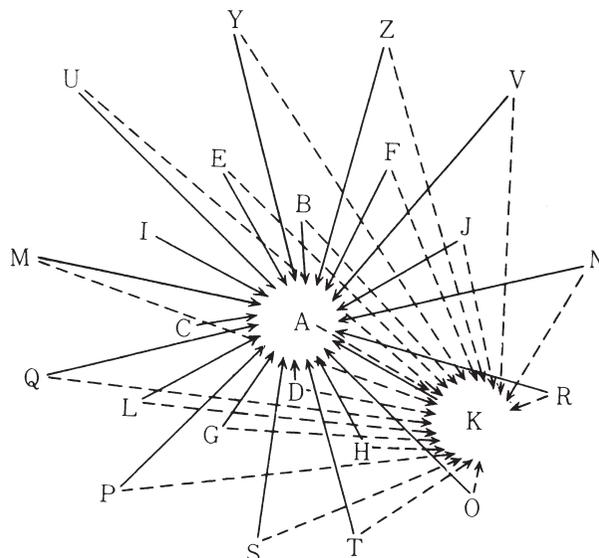
このように菅野仁は述べる。その「他者」とは「存在を自己諒解させる装置」であり、何らかの共同性をもつ具体的他者である。つまり、関係性の創造こそ、自己の発生となるのである。

河合隼雄は井筒俊彦の講演を引用しながら、「本来の『私』なんていうものはない。……『私』はすべてのものとの関係の総和によって規定されている」と語っている(2008：215)。

物事を考えるときに関係のほうが優先します。Aというものの存立に、BもCもDも、すべてが関わっている全体関連性を無視しては一物の存在も考えられないのです。近代科学は「個」が優先します。「個」を明確にして、その「個」と「個」はどのような関係にあるのか。(中略)ところが人間なんていうものは「個」を考える前に本当は関係が「存在」している。(河合、中沢、2008：215-216)

河合は、井筒の言葉を借りながら、『「存在」(being)』ということが根本になってきて、それは名付けることができないのです。したがって、「無」とか「空」とでも呼ぶより仕方がない。しかしそれは何もないのではなく、逆に存在そのものと言っていいのです」と述べる。

図1 「無自性」(関係の総和としての私)(河合、中沢、2008：217)



出典：井筒俊彦著『コスモスとアンチコスモス。東洋哲学のために』(岩波書店、1989年)より

(2) バックパッカーの“自分無くし”

一般的に語られるバックパッカーという存在もまた、画一化均質化された社会のなかで、近代的な自己の存在と向き合う人びとであった。その帰結としては、二通り見ることができた。ひとつは、自己に自覚的であり、実存主義的な自分探しに答えを求める人びと。もうひとつは、能動的な自己と距離を置き、他者との関係性の流れのなかに答えを見出そうとする人びとである。

そして、前者は疎外された社会から自由になるため、実存に自己を求め、結果、その実存的自己にも疎外されることが見えてきた。このような自分探しをする存在がバックパッカーとして一般的に認識されていたが、近年、後者のような存在が目立つようになってきた。

有本は斉藤聖二を引用して次のように述べている。

バックパッカーを推奨するような言説にも「バックパッカーをするなら群れて動かない方がよい。1人で行動することが、自分を現地に投げ出すもっとも簡単な方法だ」といったものが見られるように、「群れる」ということと対極に位置されるような旅行スタイルと一般的に認識されている。しかし実際にバックパッカーとして長期間海外旅行を続け、「日本人宿」という施設を利用する者たちは、特定の空間内で他の旅行者と接触し、コミュニケーションをはかり、情報交換を行い、他の旅行者との親密性を高めていく。ここには孤独でストイックな旅をするバックパッカーというイメージと相対するような、「日本人宿」を利用し他の旅行者と積極的に関わっていかうとする、いわば「群れる」バックパッカーというパラドクスを見ることができる。(2006: 124)

また、小林紀晴の表現するような「システム化された社会から抜け出て、私をみつめなおそうとする若者たちの姿、……ひたすら放浪し、孤独と向かい合い、さまざまな人間関係を重ねる。ときにはドラッグに身を委ね、また病気・トラブルと闘う、そんななかで自らの可能性をまさぐってゆく」バックパッカー像に対し、新井は、「これって本当なんだろうか？ 若者は皆、こんなストイックな旅をしているのだろうか？ ……どうもこれはバックパッキングする若者を歪曲したイメージに思えてならない」と懐疑的であることを述べている (2001: 111-112)。

表1を見ても、「自己発見や自分のアイデンティティ探し」の意識が高くないことがわかる。

このように、海外に出ても自己の確立のために自分向きだったバックパッカーたちの意識は変化してきているように感じられる。表1で上位を占める、「土地」との関わりを持ちたいという意識にである。これらの中には、他者と向かい合う自分に自己発見を求める者もいるかもしれないが、他者性をもつことにより、自己の殻を薄くし、土地の自然や人といった、他者との関係をとおして自己を忘れることに歓びを抱くように意識が変化してきているように見える。自分が存在しているというよりも、自分が存在させられてそこにあるといった感覚である。

自分とはなにものだろうか、などという問いをできる限り遠ざけ、その場の流れに

表1 旅の楽しみ（ランキング集計）（須藤、2008）

あなたにとって旅行の楽しさとは何だと 思いますか。(MA)				
No.	カテゴリ	件数	(全体)%	(除不)%
1	知らない土地の文化・歴史に	151	82.1	82.1
2	知らない土地の人の現実の生活にふれること	131	71.2	71.2
3	知らない土地の人との出会い	126	68.5	68.5
4	知らない土地の食べ物を食べること	116	63.0	63.0
7	旅人同士の出会い	109	59.2	59.2
8	自由気ままに毎日を過ごすこと	72	39.1	39.1
9	冒険	55	29.9	29.9
10	自己発見や自分のアイデンティティ探	50	27.2	27.2
5	知らない土地で売っている物を買うこと	39	21.2	21.2
13	よい写真が撮れること	33	17.9	17.9
14	なんでも安価なこと	27	14.7	14.7
11	同行者との仲が深まること	21	11.4	11.4
12	日本にいるよりほま	13	7.1	7.1
6	性的な経験	12	6.5	6.5
15	その他	8	4.3	4.3
	不明	0	0.0	
	サンプル数 (%ベース)	184	100.0	184

極力身を任せ、その場の環境に溶け込ませる。これは偶発的な出会いと出来事の連続であるバックパッカーの旅のなかで、自力というものへの懐疑心が生まれ、他者や他力を意識し、関係性からみえてくる自分を求めるようになってきているのかもしれない。

自己をみつめることで自分を探そうとしていた意識から、関係性や他力に身を委ねることによる自分の喪失という発見というものに意識が変化しているという現象は、個人主義的な自己から関係主義的な自己へと存在の主体が戻っていつているあらわれとみることができるのではないだろうか。

外こもりという形で、自分探しの帰結がある一方で、他者との関係性に没入することで結果的に自分探しが終わっているという帰結も見ることができた。そこにあるのは、“自分なくし”とも言えるほどに、他者との関係性の中に自己を求める姿である。

このように、方向性は違うが、自分探しの終焉をふたつのパターンに見ることができる。後者は、自己を発見したというよりもむしろ、自己という呪縛から解放されたと言った方が的確なものである。これは、近代的自己の克服ともいえるかもしれない。実存主義者のサルトルが課題とする、「自己の存在を乗り越えようとする実存的人間の形成」(内山、2014b: 12) という文脈の中で語られがちなバックパッカーとは、かけ離れた存在であり、現代的不幸を克服した一例と考えられる。

このことは、具体的他者との関係性による自己存在の在処の発見につながり、また、その関係性の中で自在に振る舞える自由な自分、つまり関係的自己の確立につながるものではないだろうか。

5. おわりに

「デカルトの『われ思う 故にわれ在り』に触れ、なんと当たり前のことに力を入れているのかと違和感を覚えた」(2014「三井物産戦略研究所 寺島実郎の発言」)と寺島実郎が述べるように、多くの現代人にとって、認識される自己とは当然、個として第一次的に存在するものであるだろう。「存在の本質は個のなかにある」ともいえる自己である。

現代における「自分探し」に対する違和感が本論文の問題意識となり書き始めたのだが、辿り着いたのは近代個人主義社会における個人の孤独と拠り所の探求であった。そして、その探求している拠り所こそ、個に先行する関係という存在の本質であった。

このような、存在の本質を取り戻そうとする実践が、自分探しをしてきたバックパッカーにみてとれた。それは、近代的自己、近代的自由の中でおこなわれてきた自分探しを超克した先に立ち現われた「関係的自己」という地平である。

■参考文献・資料

- 新井克弥、2001、「メディア消費化する海外旅行～バックパッキングという非日常」嶋根克己、藤村正之編、『非日常を生み出す文化装置』北樹出版
- 稲垣恭子、2012、見田宗介編集顧問、大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編集委員、『現代社会学事典』弘文堂
- 内山節、2013a、『新・幸福論—「近現代」の次に来るもの』新潮社
- 内山節、2013b、「第一章 震災からの地域の再生・復興」教育科学研究会編、『講座教育実践と教育学の再生』第4巻 地域・労働・貧困と教育、かもがわ出版
- 内山節、2014a、『自由論 自然と人間のゆらぎの中で』岩波書店
- 内山節、2014b、「哲学的思惟について」『21世紀社会デザイン研究』No.13
- 内山節、2015、「現代日本の閉塞をつきくずす「地方」の価値と力」『世界』2015年05月号、岩波書店
- 大澤真幸、2012、見田宗介編集顧問、大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編集委員、『現代社会学事典』弘文堂
- 小熊英二、2009、『1968（下）叛乱の終焉とその遺産』新曜社
- 梶田毅一、2008、『自己を生きるという意識—＜我の世界＞と実存的自己意識』金子書房
- 刈谷剛彦、2012、見田宗介編集顧問、大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編集委員、『現代社会学事典』弘文堂
- 河合隼雄、中沢新一、2008、『仏教が好き！』朝日新聞出版
- 小林敏明、2012、見田宗介編集顧問、大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編集委員、『現代社会学事典』弘文堂
- 下川裕治、2007、『日本を降りる若者たち』講談社
- 菅野仁、2012、見田宗介編集顧問、大澤真幸、吉見俊哉、鷺田清一編集委員、『現代社会学事典』弘文堂
- 住吉雅美、1997、『映笑するエゴイスト—マックス・シュティルナーの近代合理主義批判—』風行社
- テイラー、チャールズ、2004、田中智彦訳、『＜ほんもの＞という倫理—近代とその不安—』産業図書

見田宗介、2004、『現代社会の理論』岩波書店

朝日新聞、2008年12月18日、朝刊、岐阜全县、1地方面

有本尚央、2006、「旅人たちの共同体—日本人バックパッカーに関するフィールドワークから—」
『龍谷大学大学院研究紀要 社会学・社会福祉学 14』、117-131

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006607617> (アクセス日 2012年11月23日)

池田信夫、2013、「池田信夫 blog」ヘーゲルとその時代

<http://ikedanobuo.livedoor.biz/archives/51880105.html> (アクセス日 2013年12月30日)

石原豊一、2011、「現代社会における若者の現実逃避的行動についての一考察—「自分探し」の
延長線上のプロアスリート—」立命館人間科学研究第23号 59-74、立命館大学人間科学研究
所

http://r-cube.ritsumei.ac.jp/bitstream/10367/2663/1/gl23_p059ishihara.pdf (アクセス日
2014年9月13日)

大野哲也、2011、「アイデンティティの再肯定—アジアを旅する日本人バックパッカーの「自分
探し」の帰結—」関西学院大学社会学部紀要 111: 155-170

<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/bitstream/10236/7720/1/20110530-4-11.pdf> (アクセス
日 2012年11月23日)

須藤廣、2008、「消費社会のバックパッカー—日本人バックパッカーの歴史と現状—」北九州市
立大学文学部紀要 (人間関係学科) 第15巻 47-66

[https://kitakyu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_](https://kitakyu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=205&item_no=1&page_id=13&block_id=102)
[main_item_detail&item_id=205&item_no=1&page_id=13&block_id=102](https://kitakyu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=205&item_no=1&page_id=13&block_id=102) (アクセス日 2012
年11月3日)

寺島実郎、「三井物産戦略研究所 寺島実郎の発言」

<http://mitsui.mgssi.com/terashima/nouriki1303.php> (アクセス日 2014年12月23日)

日本語俗語辞書、2008

<http://zokugo-dict.com/15so/sotokomori.htm> (アクセス日 2012年8月15日)